



家臣団も周囲に多くの山城を築いて戦乱に備えた。

## 丹波篠山東部の山城

今回訪ねた篠山東部は旧山陰道が通り天引峠から京へと繋がっていると共に、能勢街道（現国道 173 号）が交差する交通の要衝であった。この要衝の地点である篠山東部には波多野氏の有力な家臣団の山城が配置されると共に、多紀郡全体では砦を含め約 50 箇所山城が築かれたと言われている。

篠山東部には主な城として以下の山城があった。

|           |    |       |
|-----------|----|-------|
| 安口（はだかす）城 | 城主 | 靱井氏   |
| 靱井城       | 城主 | 靱井氏   |
| 細工所城（荒木城） | 城主 | 荒木氏   |
| 栃梨城       | 城主 | 荒木氏   |
| 淀山城       | 城主 | 波々伯部氏 |
| 八上城       | 城主 | 波多野氏  |



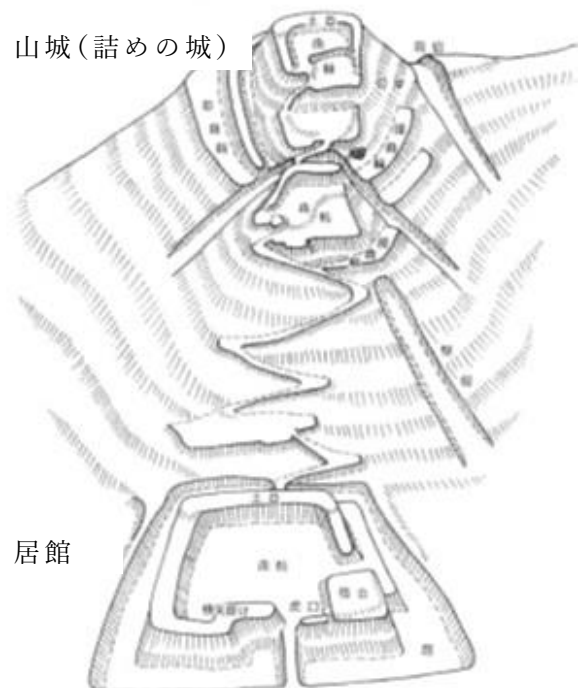
## 戦国の山城の概要

戦国時代の山城の模式図（篠山在住郷土史家田中豊茂氏資料より）に示すように平常時は下の居館で暮らし、戦いが始まると山上の詰め城に籠もり敵の攻撃に備えた。

最頂部に主郭を置き、周囲に曲輪を巡らせ山の斜面には堅堀を設けた。また、尾根部には敵の攻撃を遮断する深い堀切を設けている。主郭の出入口には敵の攻撃を防御するべく幅を小さくし、道を屈曲させた虎口構造となっている。

この模式図のように戦国時代の山城はほとんど石垣が使用されておらず、たまに石垣が見られる山城もあるが土砂が流れるのを防止する程度で、本格的な石積構造ができるのは戦国時代の終末期である。

山城（詰め城）



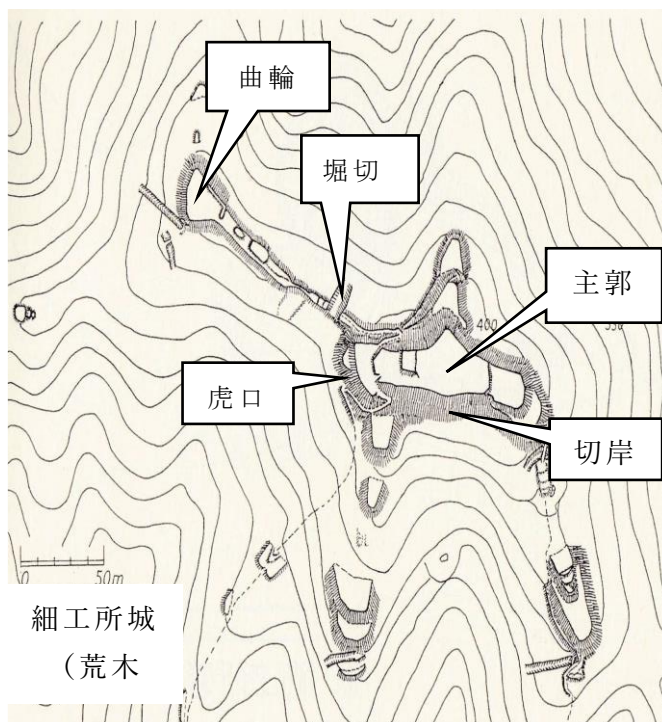
## 細工所城（荒木城）

### ■ 細工所城の構造

丹波篠山市細工所集落の背後の標高404mの山頂一帯に城跡があり、麓からの比高は170mで、規模は350×200mである。主郭は山頂を削平し、南北30m東西70mと広大である。

主郭への取りつきはかなり急勾配になっており、二折りの虎口で防御が厳重である。

西側には図面では堀切があることになっているが、山が荒れて確認することができなかった。図面には出ていないが、登り口付近にかなり広い曲輪があるがこの部分が居館と思われる。



## ■細工所城の歴史と荒木氏

細工所城の城主は荒木山城守氏綱あるいは氏香とも言われており、天文年間（1532～1555）に築かれたと伝わっている。氏綱は波多野氏の有力家臣の一人で、黒井城主赤井直正の赤鬼に対して荒木鬼と呼ばれ恐れられた豪勇の武将と言われている。

天正5年（1577）に始まった明智光秀の第二次丹波攻めでは、激戦の後同6年（1578）4月降伏した。信長公記や光秀の手紙によれば水の手を止められ落城したとある。

細工所城東側600mの所に通称鉄砲丸という山がある。東西30m南北20m位の削平地があり、細工所城より60m位高く、光秀はこの場所より鉄砲（大筒か）を放って攻撃したのではないかとされている。

ここで時代を遡って、明智光秀による丹波攻略について触れてみたい。

永禄11年（1568）織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、波多野元秀は太刀などを贈り信長に忠誠を誓った。しかし信長が義昭を追放すると、丹波衆の中に信長から離反するものがあり、天正3年（1575）から光秀による丹波攻略が始まる。光秀は離反した赤井直正を攻めるが、波多野秀治（元秀の養子）が反旗を翻し、背後から攻撃したため光秀は敗退する。

しかし、天正5年（1577）再度の丹波攻略により同年10月靱井城が攻略され、天正6年（1578）4月細工所城も攻略される。翌7年（1579）6月八上城を落とし、波多野兄弟は安土にて処刑され波多野氏は滅亡する。

波多野氏が拠る八上城と共に周りを取り巻く諸城も落城し、その後城として利用されることもなかった。

細工所城が落城した後、荒木氏は光秀から武勇を買われ家臣になるよう誘われるが病気を理由に断り、子息氏清が仕えるようになるが、山崎合戦か坂本城の戦いで戦死したと伝えられる。

荒木氏の出自については志摩国（三重県）の出で、縁者の波多野氏を頼って丹波に来たという説もあるが、天田郡に荒木郷（今の福知山市荒木）という所があり、その土豪との説もある。

江戸時代に編纂された丹波志によれば南北朝時代に福知山の横山（今の福知山城）に荒木山城守義村が掻き上げの城を築き、後に波多野氏に仕えたとある。

荒木氏が歴史上出てくるのは細川両家記の永正8年（1511）7月の芦屋の鷹尾城を巡る戦いである。荒木氏及び波多野氏は細川高国側で細川澄元と戦っている。波多野元清は元々高国派で澄元とは敵対関係にあったが、大永6年（1526）7月弟香西元盛が細川尹賢の讒言により高国に殺害されたことにより、細川澄元に付くことになった。

大永6年（1526）11月細川高国勢が丹波の八上城の波多野氏を攻めた際、高国の馬回り衆として荒木大蔵の名が出てくる。その戦いで手柄を立て安芸守を与えられるが、大永7年（1527）2月桂川の合戦で荒木父子は討死とある。その後高国は享禄4年（1531）尼崎で敗死（大物崩れ）。波多野氏は澄元の子晴元に従い、丹波の守護代になるがその頃荒木氏の一族が波多野氏に従い、細工所城を築いたのではないだろうか。

荒木山城守氏綱（氏香という説もある）の出自は諸説あり実像は判然としない。地元にはこの荒木氏の末裔が帰農し、その後姓を変え澤山家として存続しているとの話があり、細工所城から山を越えた丹波篠山市市野々の澤山家を訪ねてみたが、不在で同家に伝わる澤山系図（下記掲載）の話を伺うことは出来なかった。

また、細工所城の下にある瑞祥寺は荒木山城守が天文年間（1532～1555）に再建したと伝っている。ここには新しいが荒木家の墓があり、家紋は牡丹である。

この時代、荒木氏が細工所城に存在したことを今に伝えている。

摂津の荒木村重の荒木系図では祖先は丹波出身で、父義村の時代に摂津の坂根（川西市坂根）に移り住んだとなっている。

荒木系図では義村の父は高村で祖父は家村となっており、曾祖父は重村である。細川両家記の桂川の合戦では荒木氏は細川高国側に属し荒木父子討死とある。死んだのは家村・高村親子と思われる。



澤山家長屋門



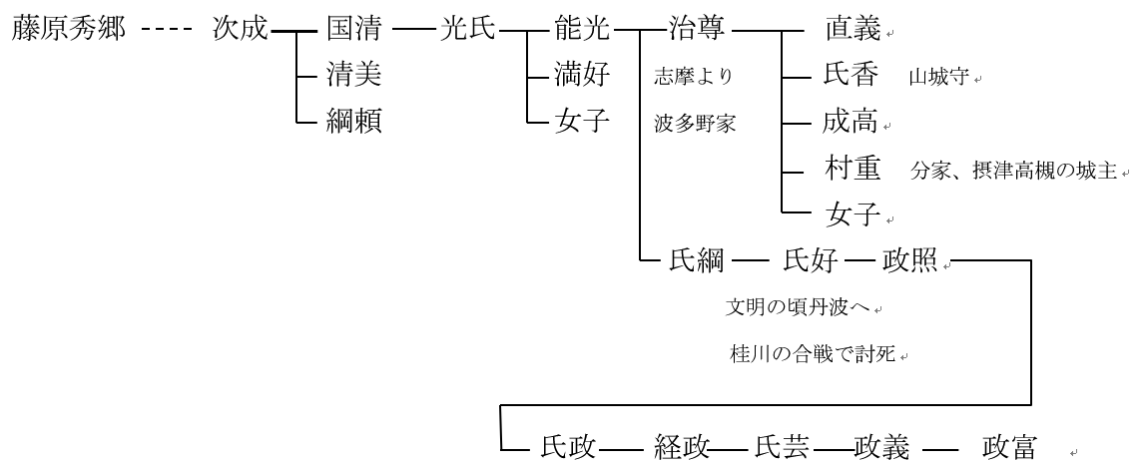
瑞祥寺

【荒木系図】（系図纂要：既存の記録や系図を纏めた物より）

重村—家村—高村—義村—村重。

この当時、波多野氏は細川澄元側についており、そのため子の義村は波多野氏と袂を分かち川西に出たのではないだろうか。義村の曾祖父の重村と細工所城主荒木氏綱の関係を結びつける史料は無く、荒木村重と丹波の荒木氏の関係は今となっては不明というしかない。

【澤山系図】（東京大学史料編纂所データベース）



## 八上城

篠山盆地の南側に位置し通称高城山と呼ばれ、標高 462m 比高 250m の山城で北側は旧山陰道に面している。東西 3 km 南北 1.4 km にも及び、主郭部分には石垣を積んだ曲輪もある広大な城で、黒井城、八木城と共に丹波三大山城と呼ばれている。

今回は時間がなかったため登り口にある八上春日神社までしか行けなかったが、多紀郡を支配した波多野氏について少し触れてみたい。

前に述べたように波多野氏は応仁の乱後の文明 9 年（1477 年）守護の細川政元から恩賞として多紀郡の小守護代に補佐され、下向後永正 5 年（1508）城を築いた。

波多野氏は元々丹波出身ではなく、細川勝元に仕えた石見の国の吉里清秀が母方の波多野姓を名乗ったのが始まりとされている。

その後家督を継いだ波多野元清は弟元盛を香西氏に、末弟の賢治を柳本家に養子に入れると共に、高国・澄元の細川家二流の抗争に各地の国人と同様に向背しながら勢力を強め丹波を支配した。

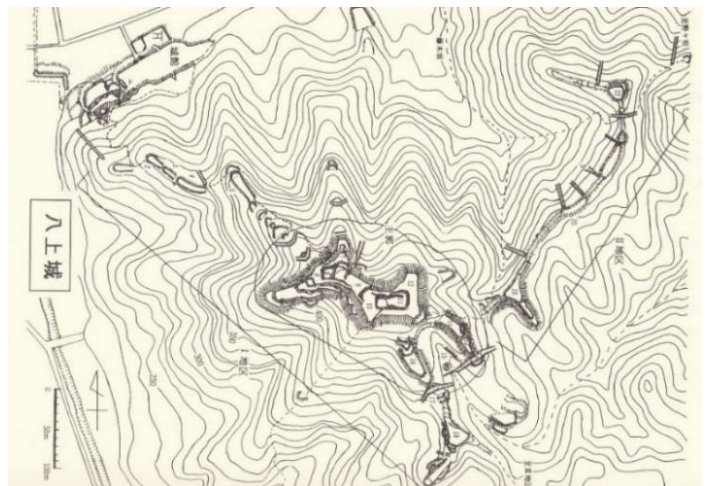
天正 3 年（1575）の織田軍の黒井城の赤井直正攻め（第一次丹波攻略）が始まった時、波多野秀治は織田軍の明智光秀に従っていたが、秀治は赤井と通じ背後より襲い光秀を敗走させた。（赤井の呼び込み作戦と言われている）

その後天正 5 年（1577）第二次丹波攻略で八上城は 1 年 4 ヶ月に及ぶ徹底した包囲作戦により、天正 7 年（1579）6 月陥落し、波多野兄弟は捕らえられ安土にて磔に処され、波多野家は滅亡する。

八上城の攻防については靱井家日記や他の書物にも書かれており、光秀は和議を結ぶため母を人質に出したが信長は光秀が止めるのを無視し、波多野兄弟を殺害したため、光秀の母は八上城で磔にされたという話がある。（城内に磔の松の跡がある）

これは光秀が謀反を起こす一つの要因とされているが、信憑性は低い。天正 7 年 4 月の時点では兵たちは助命して退城しようと懇望しており、既に 4～5 百人も餓死しているとの状況が光秀の書状にもあり、落城が近かったと思われる。

実態は飢餓に苦しむ城内の兵が波多野氏を討って降伏しようとしたため、波多野兄弟は城を出たというのが本当ではないだろうか。



篠山東部の城を全部紹介できなかったが、これら戦国時代の山城は利用されることもなく、一部の城では元の自然の山に還りその所在すら分からない城もある。しかしながら地名や言い伝えから、そこには戦国時代に城をめぐって攻防を続けた将兵がいたことを今に伝えている。

【参考文献】

丹波志

郷土の城ものがたり 丹有編

丹波史を探る

戦国織豊期城郭編

荒木村重研究序説

多紀郷土史話

靱井城と靱井氏（田中豊茂）

群書類従細川両家記